

飛耳長目

森 信 三 先 生 参 究 誌

通巻122号 平成26年1月1日発行

「修身教授録」探求（第八十七回）

卑屈と謙遜

森 信 三

授業始めに先生次の二つのことを言われる。

一、人間の精神的弾力というものは書物に向かう力によって鍛えられるものです。又人間のたしなみというものは言葉を慎む所から始まるものです。二、廊下の紙屑というものは、大体これを見つけた人が拾ってくれるまでそこに待っているのが普通です。もっともこれは紙屑を拾うことを力めている人のみが知っていることなんです。このように世の中には実行しない人には到底分らない世界が限りなくあるものです。と静かに言われた。

■「謙遜」について

諸君は生れてから今日までのうちには、幾度も人は謙遜でなければならぬということを聞かされて来たことと思います。しかし真に謙遜になるには一体どうしたらなるものかと言う点については、余り深く考えてみたこととはないではないかと思えます。そこで以下の点に關していささか私の考えを申して見たいと思います。同時にこの点を明らかにすることが、やがて又ともすれば謙遜と紛れ易い卑屈と真の謙遜とは、いかなる点が違うかと言うことも自ら明らかになるかと思えます。さて話を明瞭にする為に、最初に先づ結

論を申すことに致しましょう。そもそも真の謙遜というものは、内に確乎たる所がなくては出来ないことであります。換言すれば人は自ら信ずる所が出来て初めて真に謙遜にもなり得ると思うのです。斯様に申しますと恐らく諸君の多くの人は意外の感を抱かれることでしょう。そこで以下この点について多少説明を試みて見ましょう。

■自分の分際を識る

そもそも謙遜ということとは、人間の自覚から生れる徳の一種であります。この事は謙遜という徳の本質を明らかにする上に於て深く注意すべきことだと思ふのです。勿論一方から申せば、苟も徳目と名付けられる程のものにして、自覚を伴わないもののあるう筈はないともいえましょう。しかしまた他の一面から考えれば、同じく徳といわれるものの中に、その自覚の程度ならびに様式はそれぞれ相違があつて決して一樣ではないのです。例えて申せば、勇氣などという徳は、勿論眞勇などと呼ばれるものに到つて確かに自覚的なものでありますが、しかし普通に勇氣といわれるものと謙遜とは、そこに或程度の自覚の相違があると言えましょう。即ち謙遜という徳は相手に対する自分の分際を考え、相手との真価の相違に従つて我が身を慎み、

さし出た所のない様に我が身を処するという
ことであります。勿論謙遜ということは、ひ
とり目上の人に対する場合のみでなく同輩
に対しても成立し、更には自分より目下の
者に対しても必要な事柄であります。いや或
る意味では目下の者に対する際特に必要だ
とも言えましょう。

蓋し人は自分より目下の者に対した時一
番傲慢な態度に陥り易いからであります。然
るにこの場合注目すべき現象は、目上の人に
対して卑屈な人間ほど却って目下の者に対し
ては多くは傲慢になり易いということであり
ます。これは深く考えてみる必要のあること
であります。かくして謙遜は目上の人乃至同
輩に対しても必要なばかりでなく、更に目下
の者に対しても大いに必要な徳目といえましょ
う。しかもそれは必ず相手との関係を考
えて、常にその宜しきを失わないということが
大切であります。と申すのは、如何に謙遜
なのがよいからといって目下の者に対して馬鹿
丁寧なのは却って滑稽でありまして、そうい
うことはその人の人間としての甘さを示すも
のであり、更にはその心事に卑しきがあると
さえいえましょう。

■我が身を慎んで正しく保つ

そもそも謙遜ということは、我が身を慎ん

で己を正しく保つということがその根本精神
を為すのであります。つまり如何なる相手に
対しても常に相手との正しい関係に於いて自
己を取り失わぬと云うことです。即ち必要
以上に出しゃばりもしなければ、同時に又妙
にべこべこもしないということでありま
す。して見れば人は真に謙遜ならんが為には、何よ
りも先づ自己というものがシャンと確立して
いること大切であるといえましょう。即ち相
手が目下であるからと調子に乗らず、また
相手が目上なればとて妙にべこつかず、常に
相手との正しい身分の關係に於いて、まさに
あるべき様に我が身を処するということであ
ります。

■自己を取り失う危うさ

そこで諸君は、私が始めに真の謙遜の為
には自ら信ずる所がなくてはならぬと申した
意味が多少はお分かりになったことと思いま
す。自ら信ずるとは、要するに自己を取り
失わぬということでありま
す。そこで必要以上
にべこべこにするのは真の謙遜でなくして卑
屈でありますが、卑屈とは結局自己が確立
していないから起る現象であります。が同
時にまた相手が目下なればとて、いやに傲慢
な態度が出るというのはこれまた自己を失っ
たものと言わねばなりません。かくして卑

屈も傲慢も自己を取り失うところから起る
点では結局同一であります。

■傲慢とづるさごと

斯様に考えて参りますと、一口に「謙遜」
といつてもその決して容易ならざることが分
りましよう。そもそも私共が一つの徳目を真
に徹底的に履み行わんが為には、全人格その
ものの根本的転換を必要とするのでありま
す。例えば人が傲慢に振る舞うということ
は、畢竟その人が調子に乗っているというこ
とであります。従つてそれは偉そうにしていな
がら実は人間のお目出度い何よりの証拠です。
つまり自分のそうした態度が外から見て如
何に滑稽であるかということに気付かぬ愚か
さであります。同時に又卑屈ということは一
面からはその人間のづるさの証拠ともいえ
ましよう。何となれば人間卑屈の裏には必ず
功利打算の念が潜んでいるからであります。
例えば卑屈とは実際にはそれほど尊敬もし
ていない人に対しても、功利打算の念からし
て如何にも尊敬しているかの如くに振舞うこ
とだからであります。これ人間のづるさでな
くして何でしょう。かくして傲慢はその外見
の如何にも偉らそうなのにも拘わらず、実は
人間のお芽出度い証拠であり、又卑屈はその
外見のしおらしさにも拘わらず、実は人間の

づるさの現れであるといつてよいでしょう。そうしてこのお芽出度さ、づるさともにそれが真実でない点では一つであります。又実に事実には於ても目上の人に向つて卑屈な人間は、目下のものに対して多くは傲慢な態度をとるということは既に申した通りであります。かような事柄は諸君が徳目というものをただ言葉の上だけで考えていないで、実際の上には如何に現れているかを考えていかれば次第に分ってくるのかと思います。では今日はこれまで。

▼修身科授業の根本姿勢

諸君のうちには私の修身の授業は少し変だと思われる人があるかも知れませんが、これは私が私自身に対してその時その時に一番心の問題となっていることを話しているのです。ですから多くの場合諸君に対して話すというよりも私が自分自身に言い聞かせているのです。ですからどういう事が出てくるのか、実は話す私にも分らぬといつてもよいのです。例えば相当の人が食事の作法を知らなかったという場合を目撃したなら、その次の時間には食事の作法について話すかも知れませんが、ですからもし準備をしないといえれば少しもしない訳ですし、又準備するといえれば二六時中何時も準備しているわけであります。即ち見るところ聞くとところ皆修身の種ならざるはないわけです。

そこを良く知っていて貰わないと、講義していても諸君の心と私の心とがチグハグになってしまします。

もう一つ……凡て偉人というものは後悔しないものようであります。現に宮本武蔵などもその「五輪之書」に於て「われに後悔なし」といっておりま。そこで諸君もひとつ自分の過去について後悔なき人間になって貰いたいものです。それには奴何なる失敗も必ずやこれを最善に生かすという心がけが大切でしょう。失敗を成功以上に生かす人間こそ真に畏るべき人間であります。

（大倉孟記）

（「修身教授録」第三巻昭和18年9月同志同業社刊行）
本講は平成元年致知出版社から発行された内容と殆ど同一であるが、あえて掲載した。森信三先生が伝えたいと熱望された一徳目であると思うからである。（二繁）

「核と軍備と」（微言）

森信三

○アメリカがビキニ諸島の辺で水素爆弾の実験をして、その際の死の灰がわが国のマグロ漁父たちに降りかかったという事件ほど、最近の世界の出来事のうち重大な事件はないと言つてよからう。

○この事件の示唆するもの、ないしはそれによつて現に生じ、また今後生じるであろう事

柄は実に重大である。ある意味では現在における全人類の思索の中心は、まさにこのビキニの死の灰に焦点せしめるべきだといつても決して過言ではあるまい。

○それらのうちの第一は、人類は今や「原爆廃棄」とともにさらに百尺竿頭一步を進めて「全軍備の即時放棄」の時期に到達したといふことを、何物にもまして深く人類の五体に感ぜしめたといふことである。

○戦争の廃止とか、地上の軍備の即時撤廃の主張は、終戦以来小誌が常に一貫して唱導してきたところであるが、今やこの人類の当面する最も深刻な真理に、人類全体が現実的に直面し出したことが、事実によつて実証せられたといふことである。

○それについても考えさせられる事は、米我が国の敗戦とともにその全軍備を撤去せしめ、強いるに「不戦憲法」を以てしながら、しかもそれから十年を出ない今日、再軍備を強制するともに、そのための重大支障となつていところの、かつての日、自らが強いた「不戦憲法」の変更を、強制せんとしつつあるといふことである。我らに良心があり、主体性のある限り、我等は米国の犯さんとしてつあるこの誤謬と罪惡と断じて許すわけにゆかない。況んやして原子兵器の威力が文字通り人類を殲滅せしめることを自らが実証しつつ

あるにおいておやである。

○なおそれについて誤解の無いために付記しておくが、そのように言うことは、何も米国のみを悪しとして、その対立者であるソ連を良しとするの謂いでは決してないということである。けだし敗戦により民族として魂の目を開かれた我々は、今日いかなるものに対して、その批判の目を閉じるわけにゆかないのである。

○自由を説きつつ、内部に民族その他の矛盾を包蔵せしめている米国と、平等を標榜して少なくとも自国内では民族間の差等はつけないが、一党の独裁によって大衆の自由の確保せられていないソ連と…我々はそのいずれをも無批判、無条件に肯定するわけにゆかないである。

○ただここに忘れてならない一事は、現在われわれが直接その重圧を受けているのは米国であつて、ソ連ではないということである。それ故に仮に現在自分が身を置くとしたら、ソ連よりも米国の方が多少はまだましだとしても、我々としては対米批判の眼を閉じるわけにゆかないのである。

○注目を要する事は、今日ピキニの「死の灰」並びにその後、この事件に対してとつた米国の態度によって、戦後のわが国において初めて民衆による対米批判が開始せられたという

一事である。これまでジャーナリズムの上で、文字の上で行われた反米批判は、米国のためにさまで恐るべきものではなかったと言つてよいであろう。だが、今回の「死のマグロ事件」によつて開始されんとしつつある「対米批判」は断じてそれと同一視するわけにゆくまい。何となればそれは一般庶民がその身にこたえたところから来るものだからである。

(「開頭」77号昭和22年4月号)

▼戦後60有余年を経て日本と世界の軍事的情勢は大きく変化している。森信三先生指摘の通り戦後日本は米国の影響により順次軍備を増強し、周辺国との関係性において非核三原則を掲げるも、事実上米国の核の傘に守られているといつて過言ではあるまい。核は森信三先生が希望された方向とは正逆の方向に世界は進んで来て、原子力の利用は今後も増えこそすれなくなることはないであろう。

▼日本は巨大地震の影響で福島原発に未曾有の大被害を受け、今なおその廃棄に向かつて英知を結集している。かえつて世界に先がけて原発の廃棄処理について先進的知見を蓄積し、遠い将来日本が世界の安全な利用に道を拓くことにつながると愚生は期待を持っている。(二繁)

あとがきに替えて

どちら様も佳き新年をお迎えのことと拝察いたします。森信三先生の未発表の？思つかいを見つけ、それを有縁の方々に知つて戴こうとの思いを今日まで続けてこられたのも読者あつてのことであると、中心から御礼を申し上げたいと思います。愚生は70歳を機に年賀等を廃していますこと、ご理解を賜り、今後ともよろしくお願いを申し上げます。(26日二繁)

第129回「かよう会」のご案内

日時 平成26年1月21日(火)

18時30分～(毎月第三火曜日原則)

場所 四ツ橋ビル地下1階『会議室』
「電話」(四ツ橋ビル 管理事務所)
06-6531-3686

交通 地下鉄：四ツ橋線四ツ橋駅下車
2番出口へ。歩30秒
「長堀鶴見緑線」並びに「御堂筋線」
心斎橋駅及び「クリスタル長堀」との
連絡口で直結。

テキスト 森 信三著「修身教授録」(致知出版)
2300円 (大きな書店で購入)
1/21一時事
2/18良寛戒語
3/18質問

参加費 1000円

〒633-0003
桜井市朝倉台東2-538-89
電話0744-513422
Email:hij3@ken.jp
http://web1.ken.jp/syushin